血の色に似た酒の味はよく判らなかった。隣でグラスの中身をぐいと飲みかけた従弟が噎せ返る。
「うわっ、まずっ！」
「そうか？」
「甘くない。葡萄ジュースのが美味しい」
「お子様だな」
むっと頬を膨らませ、彼はむきになってまたワインを口に含む。同時にテーブルの上のチョコレートに手を伸ばすのを見てナオヤは笑い、そうやって自分達が和やかにいられる事実を不思議に思う。
どちらかというとワインのほうがチョコレートの口直しというようなペースで飲む従弟を見ているうちにナオヤは十数年前の彼を思いだした。いつもナオヤの後ろをついてまわり、何でも同じようにやりたがった幼児の頃の従弟。ナオヤが使っているとなれば刃物でもパソコンでも触りたがるので目が離せなかった。
（こいつもそういえばまだ大人ぶりたい年頃か）
救世主になっていなければナオヤのアパートかどこかでやはり同じように過ごしたのだろうか。自分を未だに家族と呼ぶこの従弟はアベルとは違ってナオヤを許し続けている。彼の味方になってやる事も、潔く姿を消す事もしないままの中途半端な関係はいつまで続くのだろう。彼が救世主でいられなくなるまでか、それとも自分のほうが見限るのか。未来の事は判らないが、翔門会の彼の扱いが気に入らないと思う程度には自分は夕夜に執着し続けている。
「それにしてもだ。お前はまだ生きているのに聖餐とは趣味が悪いな」
「おかしな事なの？」
「血と肉を分け与え、だぞ。お前は連中に喰われてやるつもりか？」
「そういうグロい話じゃないと思うんだけどなあ」
残り少ないグラスを翳して彼は考えこみ、やがて口を開いた。
「オレが何か意味を用意するとしたらさ、祝福のおまじないだよ。こんなのはただのお酒だ」
ナオヤを振り仰ぎ、続けて言い募る。
「でもナオヤなら、オレを食べていいよ」
どういう意味だと問い返す前に、彼の目許がうっすら赤いと気がついた。従弟はチョコレートばかり食べていると思っていたが、見れば瓶はもう殆ど空っぽだ。自分は半分程度しか飲んでいない。呆れた舌打ちをしてグラスを取りあげる。夕夜は空になった自分の手を不思議そうに見つめ、とろりとしたその視線を再びナオヤに移した。
「もうないぞ」